

3. 牧川北岸地区

1. 地区の概要

牧川の流れが北—南から西—東に変化する地点の北側に窯跡が分布する地区である。鎌谷、関垣、日置支郡が該当する。牧川の北側には平野部があり、田畑と集落が広がっている。現在は、住宅などの建物が多く、夜久野学園があるほか、集落に面する山の斜面には墓地が複数見受けられる。

牧川北岸地区での須恵器生産は末窯の黎明期に当たる7世紀前半からはじまる。その後、8世紀後半以降には窯がみられなくなる。9世紀中葉に牧川南岸地区でも操業がおこなわれなくなったのち、9世紀末に再び窯がみられるようになる。

2. 鎌谷支群 (KT)

(1) 概要

小字鎌谷、ヲカノ、宮ノ谷の3つの地域に分布する窯跡群で、夜久野学園のある小さな台地を囲むように8基の窯跡が確認されている。西側の尾根には1～5号窯が確認されており、須恵器の散布が確認されている。現在は墓地になっており、削平を受けていると考えられ、明確な窯体の痕跡は確認できない。台地の北側東方には6～8号窯が分布している。夜久野学園の建設の際に発掘調査がおこなわれており、その際には灰原が検出されたが、現在この周辺に遺物の散布がほとんど確認できない。

この支群では、発掘調査の際に7世紀から8世紀の須恵器と共に桶巻きづくりの瓦が出土しており、須恵器と瓦の生産が兼業されていたと考えられる。

(2) 4号窯

①現状

鎌谷4号窯として報告されている窯跡である。現状では遺物の散布を確認できるものの、窯体は確認できない。ここより東方に位置する高内鎌谷遺跡西灰原からも瓦が出土していることから、本窯跡を含めこの周辺で瓦生産がおこなわれていたと考えられる。 (池田野々花)

②採集遺物 (図1-1～4)

壺 3は壺の肩部である。外面全体に自然釉がかかり器面の観察は難しいが、肩上部に沈線と波状文が確認できる。内面には回転ナデの痕跡が明瞭に残る。 (井川)

瓦 4は丸瓦で、凹面には細やかな布目痕を残し、凸面と広端面にはヨコナデを施す。凹面の広端面から3cm程の位置の割れ目に着目すると側面で破面を成し、凸面では広端面側の粘土が上に覆いかぶさる。これは粘土紐を積み重ねた痕跡と考えられることから、桶巻作りの用法で製作された可能性がある。高内鎌谷遺跡西側灰原からも粘土紐桶巻作りの平瓦が出土しており関連が伺える。

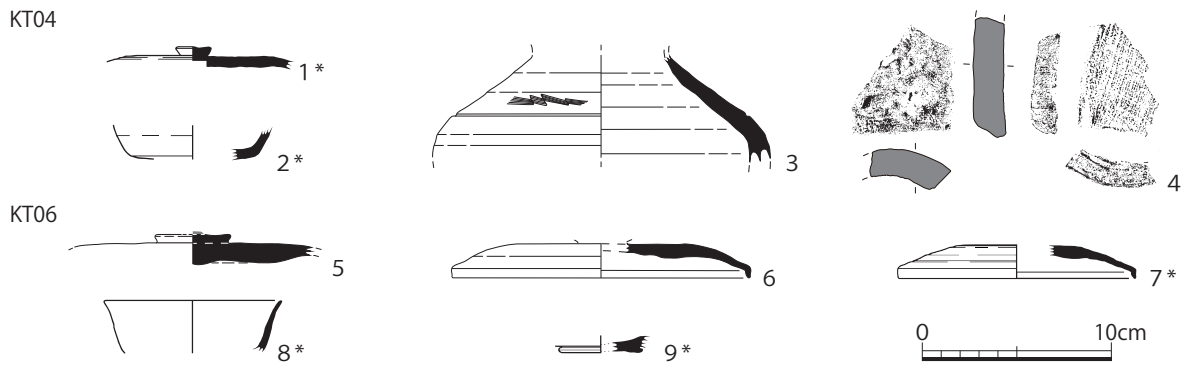


図1 KT04・06 採集遺物
(*をつけたものは東 2018 から引用。以下同じ。)

このほか、東報告ではつまみ付きの杯蓋と杯Aが報告されている。

③時期

波状文を施文した壺がみられることから夜久野Ⅲ期に比定できる。

(山内愛弓)

(3) 6号窯

①現状

夜久野学園校舎の北側の丘陵から南に伸びる尾根の中腹に位置する。踏査では東側斜面に4.5 mほど離れて南北にほぼ並行に並ぶ、2つの東西に伸びる窪地を確認した。北側の窪地は長さ3.3m、幅1.4 m、南側の窪地は長さ3.0m幅1.1mをはかる。6号窯よりも下の斜面は崖になっており、削平を受けていると考えられる。その下の平坦地で遺物を確認した。

(池田)

②採集遺物

杯蓋 5は扁平なつまみをもつ。つまみが重厚で器壁も厚いことから大型の杯蓋と考えられる。天井部には回転ヘラ切りの痕跡が残る。6はつまみが欠損する。全体的に器壁は薄く、天井部は平らで口縁部にかけて緩やかに湾曲し、口縁部付近で弱く屈曲する。口縁端部は垂直に落ち端部をやや尖らせ気味につまみ出す。いずれも丁寧な調整がみられる。

東報告では杯身と椀底部と考えられる平高台の破片が報告されている。



写真1 KT06 (南から)

③時期

杯蓋の形態から夜久野Ⅲ～Ⅳ期にあたりと考えられる。

(井川)

3. 関垣支群 (SG)

(1) 概要

鎌谷支群の東側に位置する、北方にのびる大小の2つの谷がある支群で、計7基の窯が確認されている。大きな谷の西側斜面には5基が並んで確認されており、発掘調査がおこなわれた窯(4号

窯)も存在する。現在はいずれも林道などで大きく削平を受けている。また、2つの谷によって形成された3つの尾根を南北に分断するような形で、東西方向の比較的浅い谷が存在する。6・7号窯はその谷に位置しており、少なくとも窯の操業時にはすでにこの地形になっていたと考えられる。

(2) 1・2号窯

①現状

関垣支群の大きな谷の西側斜面に並ぶ5基のうち谷筋の奥側に2mほど離れて位置している。尾根に沿って南北に通る林道によって大きく削平され、幅1.1mほどの窯体断面が露出している(写真2・3)。窯体内側は厚さ3cmほどの窯壁が良好に残存しており、窯壁の外側は被熱によって土が赤く変色している。元の地形をとどめていると考えられる窯体断面の上方の斜面には奥行き2.5mほどの平坦地があり、排煙部を想定することができる。(池田)

②採集遺物(図2-1~8)

杯蓋 1・2号窯どちらの窯で焼成されたものは不明だが、東報告1号窯採集の杯蓋と類似する。つまみは欠損し焼ひずんでいるが、天井部は扁平で口縁部は緩やかに屈曲し、端部は下方に短くつまみ出す。内面には回転ナデの痕が明瞭に残り、天井部外面は回転ヘラ切り未調整である。重ね焼きのため口縁部外面にのみ降灰がみられる。

既往の調査報告では1号窯で杯身、椀、壺、甕、2号窯で杯身が報告されている。

③時期

蓋杯の形態から夜久野V期に比定できる。

(3) 3号窯

①現状

1、2号窯から100mほど離れたところに関垣3号窯があり、窯体は残存しないものの良好な資料が採集できているため報告する。



写真2 SG01 近景



写真3 SG02 近景

②採集遺物（図2-9～15）

皿 11・12は皿Aで体部がわずかに外反し、口縁部にかけて内湾する。口縁端部を丸く収める。11は精巧なつくりだが、12は粗雑である。

東報告ではつまみ付きの杯蓋と杯A・Bが報告されており、東報告では甕が報告されている。

③時期

蓋杯や皿の形態から夜久野IV期と考えられる。

(4) 6・7号窯

①現状

関垣支群の大きな谷の東側、東西方向の比較的浅い谷に2基が隣接する形で位置している。6号窯は、丘陵鞍部北側の頂上付近に位置し、緩やかな斜面に窪地と前庭部を確認できる。斜面の下に狭い平坦面がある。鞍部から谷に下る斜面に須恵器片・窯壁片の散布が確認でき、7号窯の西側の傾斜面からも6号窯の時期と考えられる須恵器片が散布している。

6号窯に隣接する7号窯は、丘陵の鞍部西側に細長い落込みを確認しており、窯体であると考えられる。前庭部と考えられる地点の南側で須恵器片を採集している。

②SG06採集遺物（図2-16～22）

遺物は6号窯と7号窯の遺物が混在して散布しているが、形態の違いから2時期に分けることが可能である。本報告では東氏の報告に則る。

蓋 16は天井部と口縁部の境がわずかに屈曲し、口縁部は直線的にやや内湾する。端部はやや内傾し下方に短くつまみ出す。17は扁平なつまみを有し、外面には自然釉が付着する。天井部には重ね焼きの痕が残り、内面には須恵器片が融着する。

東報告では杯Bと皿A、稜碗が報告されている。

③SG07採集遺物（図2-23～27）

蓋 23は薄手のつくりで天井部を欠損する。体部が屈曲し、口縁部にかけて外反させて端部を丸くおさめる。回転ナデの痕跡が明瞭に残る。

杯身 24は杯Hである。体部は湾曲し口縁部がやや外反する。口縁部付近に貼付けられた内上方

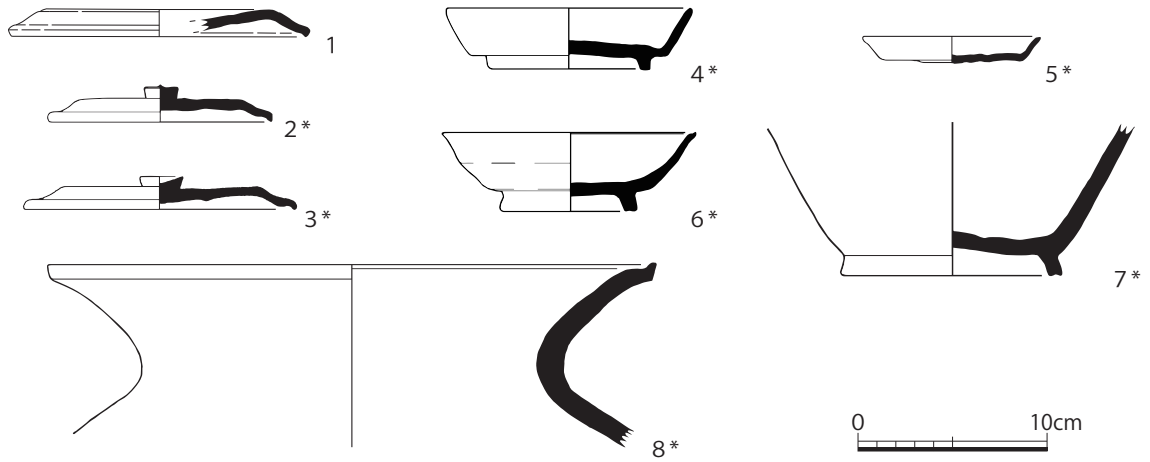


写真4 SG03 近景

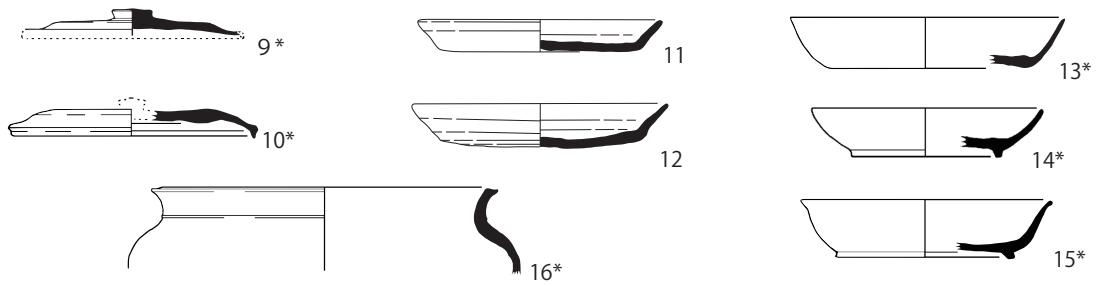


写真5 SG03 遺物散布状況

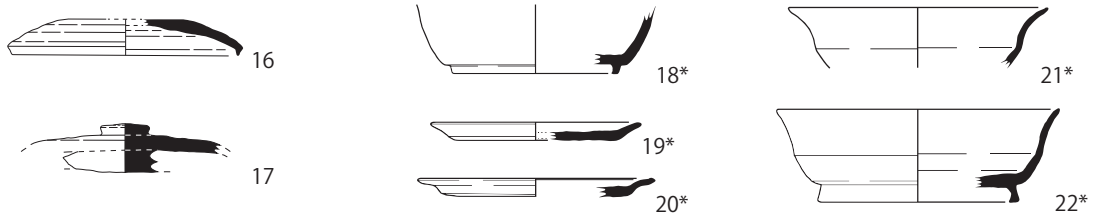
SG01・02



SG03



SG06



SG07

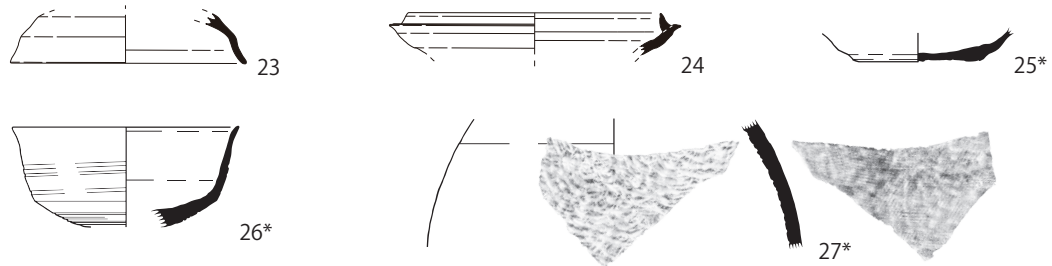


図2 SG01・02・03・06・07 採集遺物
にのびる立ち上がりは、受け部より高い位置にあり、端部を尖らせる。

東報告では杯、高台杯椀、甕が報告されている。

④時期

6号窯は杯蓋の形態や皿の形態から夜久野V～VI期にあたると考えられる。7号窯は杯Hがみられることから夜久野I期に比定できる。

(井川)

HK03

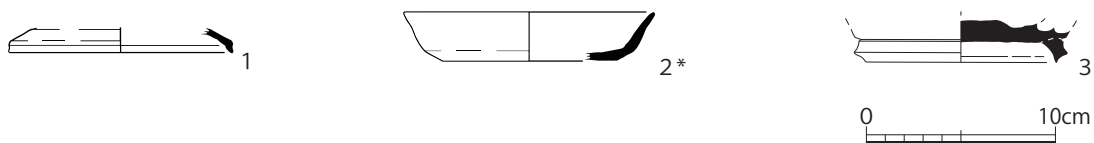


図3 HK03 採集遺物

4. 日置支群 (HK)

(1) 概要

牧川北岸地区で最も東側に位置する支群であり、北から南に伸びる大きな谷の西側の斜面に計3基が確認されている。現状では墓地や林道で削平されており、遺物の散布は認められるものの、3基ともに窯体の痕跡は確認できない。

(2) 3号窯

①現状

林道を北に進むと大きな平坦地があり、遺物を複数点確認した。斜面はほぼ崖になっており、崖の上部にも窯跡らしきものは確認できなかったため、後世の地形の改変を受けているものと考えられる。東氏によると窯壁片も確認されている(東2018)。(池田)

②採集遺物(図3-1~3)

壺 3は壺の底部である。底部外周付近に高台を張り付け、外に踏ん張る形態をなす。端部は強いナデにより外下方に面をなし、内側のみが接地する。

東報告では杯蓋、杯Aが報告されている。

③時期

各器種の形態から夜久野V期と考えられる。

(井川)



写真6 SG01・02-1 蓋



写真7 SG03-11 皿



写真8 SG03-12 皿

編集後記

本書の執筆・編集には、筆者含めた学生も少なからず携わった。思えば初めて末窯跡群の踏査に参加した時は、山の中で右も左もわからず先輩の背中にひっついていき、落ちている土器に夢中になっていた。後輩を先導する立場になると手元の地図と睨めっこしつつ、採取した土器の記録や、整理作業の日程を考えた。夜久野では先輩方の歩みも蓄積しており、私自身も他分野の先生方との合同踏査や資料の分析、成果報告会の開催などの得難い経験をした。その成果をこうして1冊にまとめ上げる段階に関わることができたことは感慨深い。多くの人と関わり、貴重な資料に触れる機会を得たことに感謝したい。(も)

表紙・裏表紙写真

上左：夜久野末窯跡群の調査風景

上中：長者森古墳

上右：ボーリング調査風景

下：夜久野末窯跡群の遠景（ナゲ地区）

(以上、菱田撮影)

裏表紙：小倉田古墳出土双龍環頭大刀

(栗山雅夫氏撮影)



京都府立大学文化遺産叢書 第28集

夜久野の後期古墳と末窯跡群

編集 菱田 哲郎 (京都府立大学文学部教授)
諫早 直人 (京都府立大学文学部准教授)
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5
発行日 2024年3月29日
印刷 北斗プリント社
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2